一主義』のような既存のビジネスモデルを破り新しい経営の姿を描こうとしている。激動の時代、今まさに企業の本質が問われている」と言っています。さて皆さんのお考えは？

キャッスレス決済で最大 30% 戻ってくるキャンペーン

11月1日より始まった佐倉市を元気に大企画。予定では1月31日で終了ですが現在の利用状況はいかがでしょうか。

千葉県も同様に 10%還元をやっていましたが還元額が上限に達し、終了となりました。佐倉市は予定通り1月31日まで継続するようです。

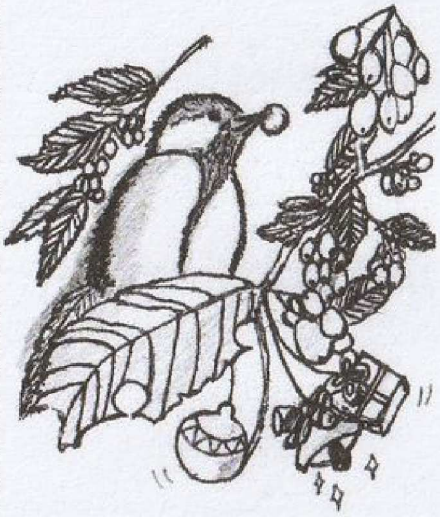
ぜひ皆さんご利用ください❣

ドラゴンへの階段 第44回（連載エッセイ版）

「おカネの教えてくれること」 佐藤 洋祐

合唱のハーモニーが聞こえるのとよく似た感覚で、秋の乾きがちな目の奥に潤いと共に沁み込む紅葉の彩りも、時が過ぎ葉のほとんどが散り落ちてしまいました。朝起きて顔を洗うときの水の冷たさに手の血管がぎゅっと収縮して、かじかむ手をどうすることもできずぐっと我慢・・・そんな寒さを感じ始めたこの頃です。

つまりは単純に、暖房が必要な時期ですが、こんな時に燃料代、電気代の値上がり！いえ、暖房費だけでなく世の中の物価がみな高騰しています。日本はまだ落ち着いている方で、海外のニュースにはもっと驚かされます。世の中のみんなが物価上昇で困っているなら、話し合って値下げを決めれば済むことでしょう！って思ったりしますが、そうは行かないのでしょう。おカネ、貨幣価値というものはこの世の経済のバランスをそれ自体が取りながら、同時にその状態を見事に数値で表します。世界の遠くどこかで起きている不調和が、佐倉市の私たちの物価にも不協和音となって聞こえてきます。それだけ今日の世界は経済的に広く深く相関している、とも言えます。おカネに関する不調和といえば、日本でも所得格差は拡大の一途を辿っています。所得の高い人にますますおカネは集中する一方で、所得が少なく生活に困窮する人の数が増えています。先ほども話しに出たように、おカネというものは経済のバランス状態を表しているのと同時に、「信用貨幣」という言葉がある様に、世の中の経済的な「信用」度合いも表します。例えば所得の多い人はそれだけ多くの人と関わり、多くの信用を得ている、その結果の所得格差の拡大ということになります。



挿絵：TAKAKO

佐藤 洋祐（サトウ ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。

私たちの生活レベルに落とし込んで観てみましょう。いきなりですが、例えば、私たちはディズニー映画が好きですよね。圧倒的な製作予算、技術、宣伝能力を駆使してヒット作を次々に生み出しているエンターテイメント会社の代表格、特に若年層とその家族層への人気は不動のものがあります。一方でそのように巨大な資本規模は有さないながらも、世の中には多くの映画製作社があり、製作費は少額でもコンセプトや創意が魅力的で、頭、心に響く映画もありますが、ディズニー映画の様に、巨額の費用をかけて派手に刺激的につくられた映画にしか目がいかない、という人が増える傾向は否めません。というより、宣伝広告の時点で、ディズニー映画くらいしか目に入ってこないくらい、広告予算が違い過ぎるのかも知れません。こうしてディズニー映画に人気が集中します。こうして所得格差は拡大していきます。

私たちが「信用」するもの、嗜好するものが何か、ということが、おカネの集まり方を決めているのが見えてきます。ブランド、名声、地位、所得の大小、見た目の美しさ、そういったものに私たちの信じるものが集中し、私たちが消費する、つまり経済活動を行うことで、そこにおカネが集まっていく、ということが往々にしてあります。そういう仕組みが、着々と堅固に築かれつつあります。

では、私はどうなのか、と申しますと…私はこうした所得格差の拡大のような社会問題が起きている状況を観ながらも、それでも世の中がこうして曲がりなりにも、というよりはむしろ、見事なまでのバランスで成り立っている事にいつも感心、感動しています。そして私自身もこのバランス構造の中に存在する一要素で、私がこのバランスの良し悪しを判断する立場ではない、ということも痛感しています。では、私はどうするのか、どんな音楽活動をするのか、それは皆さんと良いハーモニーをつくり、「信用」していただけるような音楽を奏でていくことだけ、と思っています。解りやすい数字の大小でその価値全てが判断されがちなこの浮世ではありますが（「浮世」の私なりの定義は、前号43回のエッセイをご覧ください）、そこで多くを経験し、そこに何か残すことは私がこの世に生まれた大きな目的の一つですから、それはそれで尊い営みなのです。一方で、例えば神様のために演奏する音楽のように、数字でその全てを推し量ってしまう世の中では成り立たない、しかし生命の観点から見ればもっと広く深い意味を持つ音楽が存在することを忘れないようにしながら。この多様性の時代を生きる音楽家ならではの、歓びと苦しみを思い切り享受せん、と、寒空の下で乾いた唇を噛みしめながら。

（2022年12月11日筆）